



櫻井 育子 新連載

「対人援助学マガジン」、とても大好きで読み続け、まさかまさか自分が連載を始められるとは思わず、嬉しくて小躍りして叫びながら走り出したい気持ちでいっぱいです。

書きたいこといろいろの中から、「書道」というテーマを選びました。「書道」が「対人援助」であること、「わたし」が「かかわる」ということ、などなど、ことばにできることやできないこと、まとめていけたらいいなあ、と思います。面白がっていただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いします。

わたしはここに
P325～

原田 孝 新連載

対人援助学会には新参加者です。宜しく願いいたします。マガジンに連載をということで、考えてみましたが、教育畑出身ですので、先生方に役に立つお話にしました。

私自身、先生方の研修をする機会が多く、その時によくお話していることをピックアップしてみます。どうぞ、お楽しみください。

先生のための 16 のことば
P321～

鳴海 明敏 新連載

県庁職員を定年退職した翌月から開設された、情緒障害児短期治療施設(現在

は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、13年目に入っています。その頃にも編集長から誘われたのですが、とても書き続ける自信もなく、そもそも新設施設の運営については、皆目見当もつかず、全く手探り状態だったこともあってお断りしました。

先日、改めて誘われたのですが、今回はなんとか書き続けるという最低限の条件だけはクリアできそうだという気になったので、お引き受けすることにしました。

開設当初の、変な気負いはさすがになくなってきているので、割とたんとんと書くことが出来そうな気がしたのです。

学園の各部屋には、それぞれ愛称がつけられています。職員室は「ほしぞら」、事務室は「あさひ」、医務室は「はるかぜ」、相談室は「こなゆき」という具合です。二階の子どもたちの居室には、オリオン、シリウス、タイタンなどの名前がついています。この施設の運営を決意し、施設を建て私を園長に呼んでくれた、前の理事長の夢や希望が込められているような気がしています。園長室は「こかげ」となっています。

ということでサブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。園長室から見える子どもたちや職員の活動、児相などの関係機関についてのことなど、こんなことがあったあんなことがあったという、オチのない話を日記風に牛の涎のように書いていきたいと思っています。良かったらお付き合いください。

児童心理治療施設の園長室から
～こかげのにちじょう～
P323～



高木 久美子

前号で初投稿させていただき、おかげさまでうれしい反響がたくさんありました！投稿をきっかけに新たな協働の提案を受けたりして、ライフワークの意思疎通支援の活動に大きな展開を見ることができまし

た。編集委員の方が考えてくださったタイトルロゴもとても素敵で気に入っています。ありがとうございます！

しかしその後の3ヶ月は、一生の内こんなにも早い3ヶ月は初めてというくらい早く過ぎました。次号の締切がすぐ来るくるのですね。あらためて、50号となるこのマガジンに連載執筆を続けておられる方々の偉大さを想っております。がんばるぞー。PS. 今回の投稿に登場する友人、マギーのコンサートをプロデュース中です♪一緒にしましょのホームページでご開催の案内中。お近くの方、ぜひ遊びにいらしてください！

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！
P317～

きむら あきこ

この夏の出来事。

その1 約30年ぶりに、和太鼓をたたきました。三宅島太鼓という演目でした。とても楽しかったです。

その2 何年ぶりでしょうか。発熱しました。コロナ禍の発熱がいかに診察につながらないかを実感しました。

健康第一、静かな毎日がとても有難いことだと思っています。

かぞくのはなし
P315～

原田 希

あきらめていた光回線の敷設。コロナで急に増えたオンラインに対応すべく急転直下予算がついて、僻地の我が家もブロードバンドが整いました。こちら原稿も、これまではタブレットでデータ量を気にしながら一枚ずつ送っていたのが、一瞬で複数枚ビューンと送れます。都会では当たり前のことが、我々には夢のようです。地域の仲間たちと、コロナの影響について語ることがありますが「考えてみればいいことばかりだね、光はくるし、通常では参加できなかったライブや講習会もオンラインしてくれるし、お取り寄せもなんでも叶うし、最高！」という声多数です。田舎はいい所だけど、不便。という通説、皮肉にもコロナのおかげでなくなりつつあるようです。

原田牧場Note
P253～

野中 浩一

今回のテーマは「幕を閉じる」です。一方で生活上でも仕事上でも、幕を閉じられないことだらけだと気づかされます。会計事務所さんと契約しているクラウドの会計ソフト、電子機器会社さんと契約しているネットワークとセキュリティ、銀行さんと契約している振り込みシステムなど、サブスクの網の目に見事に組み込まれています。

シンプルに生活するために田舎に移住したつもりが、案外そうでもないという現状。けれども裏を返せば多くの人や会社を支えてもらいながら生活や仕事ができているということでもあり。繋がりとしがらみは表裏一体だなあと感じる今日この頃です。

「島根の中山間地から Work as Life」
P310～

畑中美穂

ある夕方、ツクツクボウシが鳴く練習をしていた。はじめ、「鳥の音(声、ではなく)かな?」と思ったほど。やっと、初めて声を出したぐらいの未熟さ。少し間を置いて、例のフレーズらしきものの初めから鳴く。と、そのうちに、拙いながらも「つく・つく、ほー」と鳴けるようになった。よかった。ヒトゴトながらも、ほっとしてその場を離れた。

夏の間、蝉の声はよく、瞑想のときのアンカーになる。朝はいつも決まった時間に一齐に鳴きはじめるので、自然に仕組まれた時計のようである。以前 Bali で滞在したヴィラのオーナーが、「夕方の 7 時 10 分前になったら鳴き始めるよ」と言っていたら本当にそのとおりだった。人には感知できない何かがあるのだろうか。その蝉の声も、間もなく聞こえなくなる。3 年ぶりの五山の送り火は美しかったと聞いた。今年の夏も、過ぎてゆくのだなあ、と思う。

一語一絵
P299～

渡辺修宏

今回から第2章がはじまります。もしかしたらご批判やご叱責を賜ってしまうような内容かもしれませんが、そこはご一笑いただき、徒然なるままに(恥を)かきいそぐなりけり…。

対人援助実践をリポートする
この一冊
P305～

米津達也

ケアマネージャー受験対策講座、というやったこともないことに挑戦している。10 年振りぐらいにワークブックを開いて、日々資料作りに勤しむ。来年があれば、そっちの方が上手く喋れるだろうと思うが、熱量は今年の方が上だろうな、という熱い夏。

川下の風景
P297～

高井裕二

今年は大学も対面授業が再開され、大学生たちも友達と会えて嬉しそうです。オンラインでは教員と学生の雑談も生まれにくいですし、私としても学生との関係が作りやすく、対面授業がありがたいです。

そんな中、授業の休憩時間に大学生から「先生、若い頃はモテモテだったでしょうね」と言われました。恐らく褒めてくれたのですが、「若い頃は」というフレーズから、私も大学を卒業して大分年数が経ったなあとしみじみ思いました。

素敵な大人を目指して、これからも身だしなみ等整えていきたいと思います。

福祉教育への挑戦
P302～

本間 毅

心変わり

樫忠雄氏は、大正 10 年東京に生まれ、終戦の年に東京大学医学部を卒業した。亜急性脊髄視神経症、いわゆるスモン病の原因が、消化器疾患によく使われていた薬剤キノホルムであることを突き止めたことでも有名である。

昭和 40 年 1 月、樫がまだ東京大学助教授の頃、新潟大学に神経内科を開設する準備で訪れた際、脳外科の植木教授に入院患者の診断について相談されたことから、雪崩を打つようにさまざまな出来事が起こった。樫は、類い希な見識と高潔な人柄を併せ持ち、我らが齋藤恒も心服していた。海外のメチル水銀中毒症の報告に拘り、厳格な水俣病の診断と認定を続けていた熊本とは異なり、典型例ではなく

とも、他の疾患を合併している患者でも水俣病を否定するものではないとして患者の発掘に努め、判定が難しい運動失調を客観的に評価する機器の開発にも取り組んだ。

しかし昭和 47 年を境に、樫ら「審査会」による水俣病の認定率が低下した。その理由を糺した齋藤に、それまで調査や補償の邪魔ばかりしていた国と昭和電工の支払い能力を危惧する樫は返答に窮し黙りこくってしまった。これを樫の変節、あるいは背信、さらに裏切りと呼ぶ人がいる。

金や名誉に心を動かされない、純粋で他者を思いやるものが、暗闇に灯りをともしてみたら、黒い服を頭から被り、うずくまって苦しむ人々がいる。せめて、温かい食べ物と柔らかな寝床だけでもと思い、灯りをあてるほど、さらに多くの人に気付く。こんなことなら灯りをともさなければよかった。「学生には人格の涵養が必要である」と説き、生涯努力を続けたファウスト樫は、自らにメフィストフェレスの刃を向けたのだろうか。

新潟水俣病概論 II
(症候と認定基準の変遷)
P276～



土元 哲平

最近もつとも衝撃を受けたのは「塔本シスコ展」です。シスコさんの絵は、他のどんなカテゴリにも回収されないようなユニークさがある一方で、「芸術」であったこと、つまり、素朴な落書きなどとは質的に異なっていること、それが私にとっては大きな魅力でした。この経験を忘れないうちに、今回執筆しましたので、ご笑覧いただけると幸いです。

キャリアと文化の心理学
P270～

玉村 文

毎日暑い日々が続いていますね。日傘デビューをしました。そう、子ども連れだと

抱っこをしたりベビーカーを使用していると日傘を持っていないのです。一人で行動できるようにって、日傘が使えると感動でした。

50号では、子どもとの日常を4コマで描いてみました。子どもが成長しコミュニケーションを取れるようになってくると、子どもとのやりとりが面白くて面白くて。なのに、どんどん忘れていくのです。記憶に定着するように、できるだけエピソードを話したりしているのですが、こうやって4コマや文章にしておくのが一番忘れないようです。

応援 母ちゃん！
P262～

川畑 隆

ずいぶん久しぶりの鳥羽の海。海辺の店で頼んだ海鮮丼の活きた車エビが、醤油をかけた途端に宙を飛んだ。「エビがぶっとんで、おじいちゃんもぶっとんで、イスもぶっとんだ」…小1の孫がおかしくてまらない様子で繰り返す。

伊勢シーパラダイスはピカイチ。ふつうの水族館とは違って、あの大きな図体のセイウチの絨毯みたいな背中や、茹でる前のパスタみたいなヒゲに触ったし、カワウソと何度も握手した。孫に大うけだったのはドクターフィッシュ。並んで腹這いになって水槽に手を突っ込んでみると、確実に私の手にフィッシュは多く食いつく。そりゃ食べてくれる古い角質はおじいちゃんの手のように多いわけで、それでも孫は気に入ったみたい。「もう帰るよ」に「うん」と答えるのを決心するまで、何度手をつけたことか。

赤福本店では感染対策もありゆっくり座ることができた。古い座敷と川風と風鈴の音の真ん中で、懐かしい贅沢な時間を過ごせた。

そんなとってもよかった小旅行を演出してくれたのは、ほかに、プリプリの刺身のでかい鳥羽の「みなと食堂」、そしてなんといっても素敵な「ホテル アルティア 鳥羽」。

かけだ詩
P257～



高名祐美

昨日の夜、私が事務局を担っている自主勉強会の打ち合わせをオンラインで行った。事務局担当は5名で、打ち合わせに入る前にひとりずつ近況報告をしてもらう。今回メンバーの口から多く出たのは「大変だ」という言葉。「とにかく大変で…」「大変なことになっている」「大変な毎日です」。病院勤務のMSWからは、退院支援がすすまないと。そこへ次々に新しい患者が入院されてくる。感染予防の観点から、在宅サービスの利用が制限される。施設入所や転院も制限されるために退院支援がすすまないと。個人病院に併設されている住宅のケアマネからは、「2年ぶりの祭りのあとが大変でした。受診問い合わせの電話がなりやまなくて。ケアマネですけど、電話対応にまわっていました」と。「大変」はいつおさまるのだろう。自分にできることは何があるのだろう。メンバーの話を聴きながら思った。行動制限のない夏がもうすぐ終わろうとしている。

フリースクールでのSW実践を考える
P252

岡田隆介

事例検討の引っ張り過ぎという気がしないでもないが、「ビジュアル化」が目的ということで続けてみた。それにしてもイラストいじりの楽しいこと、もはや生きがいの一つになっている。テーマを変えて、あと少し頑張ろう。

エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P42～

一宮 茂子

【中国の鬼城】

1990年代末から2000年代にかけて改革開放後の高度経済成長により中国各地で地域開発が進みました。とくに住宅地開発は急拡大して高層住宅が続々と建てられ「史上最大のバブル」となりました。その後の地域開発が投資と運営事業の失

敗により高層住宅が完成しないまま放置され、購入者が入居する前に鬼城(ゴーストタウン)になった地域が多く見られました。彼らの多くは農民工で、多額の借金を背負ったまま電気も水もない鬼城で暮らしています。今や経済大国となった中国は大都市で優雅に暮らす人たちがいる一方で、こんなにも惨めな生活をしている人たちがいて、経済格差の大きさにあらためて驚かされました。家の購入は一生に一度の大きな買い物です。私は参考図書を読み込みあらゆる準備をして実際に購入するまで1年くらいかかりました。当時の私は若くて気力も体力も資金力もありましたので購入できました。このような結果に今は感謝しています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P241～

松岡 園子

今回のテーマは「手紙」でしたが、これまでの手紙の何がそんなに私の心を元気づけてくれたのだろうと、少し考察してみました。

大きく分けると「書いてくれた人から見た自分の姿」、もう1つは、「自分のしてきたことに対するその人の気持ち」の2つが言葉になったものを読んだ時、私の心は震えるのだと気づきました。

最近もらった手紙では、ダンスの先生からステージの後にもらったものがあります。先生は毎回ステージが終わるごとに、全員に手紙を書かれています。私は今年、仕事が忙しすぎて、夏のステージに向けての合同練習になかなか参加ができませんでした。それでも出たいと、動画を繰り返し見て、家で練習していることを、先生もメンバーも応援してくださっていました。ステージが終わってからの手紙には、「仕事が忙しい中の練習、大変でしたね。でもそのちゃんの頑張り、嬉しかったです」と書かれていました。この先生の「嬉しかった」にまた元気をもらいました。普段は意識することがありませんが、自分の姿やしてきたことが相手に映ったもの、それを言葉で返されると、心に響いたり、新たに気づくことがあるのだと思います。

統合失調症を患う母とともに
生きる子ども
P237～

杉江 太郎

この前、ア●ゾンプライムに登録をしようとしたところ、通常の仕様ではなく、やたらとア●ゾンスチューデント(学生用)を勧められました。通常の仕様で登録が出来たらそれでよいですし、何なら学生でもありません。その変更方法がわからず、ネットで調べていると、購入履歴から学生と判断されている可能性が高いとのことでした。最近の購入履歴は、漫画に本に、浄水器のカートリッジ、そしてコーヒー、すごろく・・・とこれだけで学生と判断されることに疑問を抱きつつ、まあグローブとバッドを買ったからと言ってプロ野球選手と判断されるわけもないだろうからとか、どうでも良いことを考えながら登録をしました。言い訳の方法とか国民の追求を逸らす方法とかいう本を買っていたら政治家とでも判断されたのでしょうか。謎は深まるばかり。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-
P232~

浅田 英輔

今年の夏は雨がすごかった。「あつつーい！夏だなあ！！」という日がとても少なかったように思う。久しぶりのねぶた祭りの間はなんとか持ちこたえたが、お盆前からずーっと雨である。大雨からの被害もすごかった。コロナの感染増加に大雨被害が重なり、大変である。4月には鳥インフルだったし、行政はここ3年、「災害対応」ばかりやっている気がする。R3 採用の保健師さんなんて、コロナ対応が仕事だと思ってしまうのではないかな。Covid-19 は、何がしたいのだろうか。次々に感染して、分身を増やしたいのか？増えて、変異して、広まって。種として(種とは言わないかもしれないが)生きながらえるのが目的なのだろうか。生きながらえるのに人を苦しめたら、排除されてしまうだろうに。人体に害を与えずにひっそり暮らした方が生存戦略としてはよいのではないだろうか。Covid よ、少し進化したまえ。

臨床のきれはし
P129~

三浦 恵子

当方は持病ゆえに装具をつけて活動し

ています。そうした装具を「弱者」「助けを求める者」の記号として解釈する立場に立つ人が一定数いることは了解していますし、それを巡る論争なども目にすることがあります。

しかし私はあくまで療養の必要上医師の指示によりそれらを装着しているにすぎないのであり、実際にそれらの装具が生活の質を上げ公務に取り組む際の効率化につながっていることは否めないもので、そうした議論とは距離を置きたいと考えていました。

しかし、今回思わぬ形で装具をつけることが他者にどういった印象を与えるのかと、私自身が受け止めてしまうような出来事があり、自分が自分の疾病や装具を着用することを受容できていないことに何よりも動揺しました。しかしその日の帰路、公共交通機関内で転倒しあやや事故になりかけたとき、差し伸べられた幾人もの手によって事故を免れるという出来事がありました。

「装具」という記号を巡り様々に考えさせられた一日でしたが、今は、差し伸べられた手の温もり、そしてそのリアリティを信じようと思っています。

コロナ禍の中、様々な立場の人が、互いのことを思いやりながら生活できればと強く願っています。

更生保護官署職員
(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)
現代社会を『関係性』という
観点から考える
P222~

迫 共

コロナの波をかいぐり、7月に早めの夏休みを取って九州東側をめぐる旅行に行ってきました。広島⇒大分⇒宮崎⇒熊本⇒広島。新幹線が通っていないので不便ですが、特急電車と高速バスを使つての移動は面白かったです。

大分では別府の明礬温泉へ。露天風呂を独占して満喫しました。

宮崎では神社めぐりと高千穂峡へ。筋肉痛になりながら素晴らしい景色を堪能しました。

熊本では大雨の影響があり、早めに帰路につきましたが、熊本城と地酒の角打ちを楽しみました。

宮崎県立美術館のカフェを、就労支援 A 型事業所がされていました。手ごろなお値段でしっかりしたランチを頂けて大満足。公立施設のカフェ等はすべからく就労支援に委託すればいいと思った次第です。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P227~



黒田 長宏

Facebook とか、line 以来、アレクサとかも出てきたが、あれよあれよとパソコンからスマホからタブレットからと、衝撃的なインターネットの新しいのがどんどん出まわっていた時期より落ち着いてしまったかなと末端ユーザーとしては思っていたものの、仮想現実についてはあまり調べていなかったが、ふと、スマホをセットしてVR体験をするという物は数千円で購入できることによりやく気付いた。そしていくつかアプリを入れてやってみたが、絵ではあるが、海中を魚などが泳いでいるのが一番没入できた。時間や場所を忘れるというか勘違いする瞬間があったように思う。だが、(結) 婚難救助隊(詳細はずうっと本文で訴え続けていること)としては、男性にとっては女性、女性にとっては男性が、例えば砂浜を水着で走り回ったり、それが絵だったり、ピンク色だったり紫色だったりするようなアプリがたくさんあるようだが、そうした仮想現実で満たされてしまつては、デーブ・スペクターさんならば、仮想現実とか言つてしまいそうな危うさを感じる。恋は幻想で富士山も遠くから観ると美しいが近づくともゴミが散乱しているとかいけないとか。田舎の道端も同様でどうしてクルマからこんなにも、ペットボトルやら空き缶やら投げ捨てていくのか、悲しくなるくらいである。おかげでゴミ拾い行事があるくらいだ。55 歳になった私はいまだ富士山に登ったことはないが、登りたいとも思わない。登ろうと思えば仮想現実がある。アプリが無かつた時代でも実は、一富士、二鷹、三なすびとかいう仮想があり、私には夢がある。私の人生に於いても女性とは夢だったのだ

ろうか。「徹子の部屋」で同い年の南野陽子ぜよが出てきて、55歳だからゴーゴーなんですよとか言って徹子さんにスルーされていたが、南野陽子くらいになると不満な人生ではなく頑張ってきたから、ゴーゴーなんて言えるのかも知れない。私にとっては加齢とは悲観に過ぎない。だが頑張ってきたところもあったとは思う。

<https://konnankyuuujotai.jimdofree.com/>

ああ結婚

P206～

尾上明代

昨日の真昼間、ヒヨドリと思われる鳥が、ベランダの物干し竿に停まっていた。ヒヨヒヨと鳴いて、よくその辺を飛んでいる鳥だが、そんなところにいること自体が初めてで、しかも私が近づいても飛び立つ気配がない。変だなとよく見ると、尾の部分がない、ケガしたか病気がわからないが、痛々しい姿である。そしてたくさんの糞をした。「大丈夫？」と話しかけると、私をじっと見つめ返し、その子(全体の大きさや、顔の幼さ？が成鳥ではない感じ)の身体が、竿の上でゆらゆら揺れ出した。糞をたくさんして、ケガしてて、逃げないし、ふらふらしているの、もうすぐ死ぬのかと思って心配になった。もし助かる可能性があっても、この状態で今竿から落ちたら、それこそ死んでしまう。

私の目を見ていた目は、だんだん閉じられていく。死んじゃうの？それとも寝る気？どうしよう、近くの獣医さんに連れて行って、治療してもらうとか？こんなに忙しいのに、そんな時間あるのか？！などと考えていると、あーらびっくり！絶対両親と思われるフルサイズのヒヨドリが、これまた驚くほど竿の近くに飛んできた。口には虫を加えている。親が子どもに何か言う(そのように思えた)と、死ぬ間際と思われる子どもが急に飛び立ったのだ。そして3羽で目の前の大きな木の中へ。親の声は、いつもと音程が違っていた。「だいじょうぶかー？」って感じに聞こえた。鳥の声を分析してその「会話内容」を「証明」している京都大学の動物学者・鈴木俊貴さんの研究について聞かせていただいたことがあるが、まさに緊急事態の声ではないかと思った。でも、虫でも食べて栄養をつければ良くなるかもしれない。残暑が厳しく、

その後、子どもはどうなったかはわからない。早い回復をお祈りしたい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究

P91～

松村奈奈子

ここ数年、毎年夏には「子ども虐待医学会」に参加しています。精神科医は身体的虐待の緊急場面を診る事はほぼ無いので、救急現場で診断して通告する最前線の小児科医の発表を、いつも頭の下がる思いで聞いています。数年前に身体的虐待について学会主催の講習会で勉強した事があります。その時に聞いた、アメリカで子どもの虐待では有名な小児科医ヘンリー・ケンプの60年前の言葉が忘れられません。「虐待であるにも関わらず、判断を誤って保護せず生命を落としてしまった子どもに謝罪するくらいなら、虐待ではないのに間違っただけ子どもを保護した時に、親に謝罪する方がまだいい」の言葉、いろんな意味で重いと思います。

精神科医の思うこと

P172～



柳 たかを

家庭菜園始めました 僕の食べ物についての嗜好は、母親からの刷り込みが影響している。本誌に漫画「やぶにらみ日記」を連載させていただいていますが、作品に我が母親も登場します。何しろ戦後の食糧難時代に4人の子供達を食べさせるために市場(スーパーまだなかった)で、ダイコンをはじめとして野菜でもサカナでも売り子と交渉して少しでも大きいもの、量のあるものを安く手に入れることに知恵を絞る女性だった。手を引かれて行くと子どもの僕には、人混みの中で母親と売り子の怒鳴りあうような値切り交渉を聞くのはハラハラドキドキの経験だった。とにかく家族全員(6人)が、お腹いっぱい

になることを第一に考えてオカズは作られた。カレーでもすき焼きでも肉は安い並肉が定番。画家の父親は食は「量より良いものを少し」の人、タクア ンやキュウリ・茄子のぬか漬けがあれば茶漬けで満足出来る安上がりな苦労人なので、母の目標は「余るくらいタツプリの副食」を子供たちの前に並べることに絞られた。なので僕は大人になるまで食材にこだわった一品物の和食の贅沢をほとんど知らずに成長した。70代の今、台所で自分のために野菜を刻んだりする機会もあるが、ほうれん草のお浸しやカツオ・昆布でダシをとって汁もの料理を作るなどは、よほど気が向かなければまずやらないし出来ない。

そんな僕が空き庭で家庭菜園を始めた。最初なのでジャガイモ・さつまいもから始めた。肥料も途中の世話もほぼ何もせず収穫できると聞いたからだ。スーパーに並ぶ野菜には大量の農薬が使われているらしい。虫が寄り付かない姿だけキレイな野菜をスーパーで買って帰りサラダにして生食しているのかもしれない。出来るだけ農薬を使わずに少ない肥料で野菜がどんな姿で育つのか知りたくなった、害虫に苦労するだろうけど自分でやればいろいろ気づきもあるに違いないし、育てたものを採って土を払いながら食べる面白さにも興味があります。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ

P176～

団遊

熱が出ました。

「そんなバカな」と思ったのですが、体温計をどの角度で見ても、「37.5」なのです。反対から読めば「5.73」なのですが、ときが時だけに、ふざけている場合でもなく、さっそく自主隔離です。

自宅の自室は小さく、寝室からマットレスを持ち込むと、部屋はほぼマットレスと化しました。しばらくして再度熱を測ると「37.9」。あがっています。しかし、何もしんどくはありません。喉も普通、咳は一度も出ない。そういえば、多少の頭痛はありました。

潜伏期間が長くて4～5日だということで、スケジュール帳で予定を振り返ると、直近から自宅、自宅、自宅、自宅、高島屋横浜

店で展覧会鑑賞、とあります。確かに自宅から出た覚えがほとんどありません。まさか高島屋？と思いましたが、一緒に行った家族は誰も発熱していません。

アレではない、と確信に近いものはあるのですが、それでも熱は「37.9」。思い込みで家族や近い人を感染リスクに晒すわけにはいきません。ということで、発熱12時間記念に1回目の抗原検査をしました。結果は「陰性」。「だよねー」と思いながらも隔離を続け、2日目。朝の体温は「37.7」でした。そして徐々に身体の節々が痛くなってきました。こうなると「抗原検査は完璧ではないと聞くし…」などマイナス情報ばかりを思い出してしまいます。そこで、24時間記念に2回目の抗原検査をしました。「早すぎると反応が出ない」と何かで見たことがある気もしたので。結果は「陰性」。「だよね、だよねー」と思いながらも、やはり熱は「37.5」あたりを往復します。

3日後には出張もあります。パラスなら早めにと焦るも、全然熱がひきません。と思ったら夕方6時頃、遂に「36.9」に！「やったー」と全身で喜びをあらわし、お風呂に入り、「今日も早めに寝よう」とマットレス部屋で一息つくと、何やらまた熱っぽい気がしてきました。「おい、嘘だろう」と思いながら体温を測ると「37.7」。「なんやねん！」と叫んでいると1時間後には「38.7」になりました。「これはヤバイ」と思い、24時間体制の発熱外来を探して行くことに。ちなみに、全然しんどくはありません。結果、夜中の病棟で、36時間記念のPCR検査を受けました。恥ずかしかったのは、病院で熱を測ったら「36.8」だったこと。「さっき38.7だったんです！」と訴えるも、まあ、ないに越したことはないんだけど。

帰宅後、こっそりとマットレス部屋に戻り、ドキドキしながらも熟睡し迎えた朝、スマホを見るとショートメールが届いていました。発熱48時間記念で受け取ったPCR検査結果は「陰性」。はてさて、いったい何だったのでしょうか。

人を育てる会社の社長が

今考えていること

P30～

村本邦子

7月、プロジェクトの仲間たちと『災厄を生きる-物語と土地の力 東日本大震災からコロナ禍まで』(村本編著、国書刊行会)を出版した。



ちょうど一年前にも『周辺からの記憶-3.11の証人となった十年』(国書刊行会)を出版したが、その時と比べ反応が鈍い。内容はすごく充実しているのだが、読みにくいからなのだろうか。戦争に、コロナに、災厄の最中を生きている現代の私たちにとって、生きた知恵がたくさん埋め込まれているから是非多くの人たちに読んで欲しいのだけど…。今回、私もついにコロナになったが、長くみなさんからたくさんの知恵を頂いてきたので、遅く生き抜いた。本文後にオマケで体験記をつけたので、そちらもどうぞ。

周辺からの記憶 ー東日本大震災 家族応援プロジェクトー P148～

國友万裕

先日ある学生から突然メッセージが来ました。「男が痛い！」を読んで、先生とぜひ話をしたいと書かれていました。

この子だけではなくて、意外に「男は痛い！」は、僕の知らないところで色々な人から読まれています。何よりも無料で読めますし、僕がこれまで出した3冊の本よりも、むしろ認知度は高いようです。男のつぶやきみたいな連載なので、みんなそれほど真剣には考えずに読んでいるんだろうけど、ちょっとでも共感してくれる人がいるというのは嬉しいものです。

徐々に男性被害がわかってもらえる日が来ているのだとしたら嬉しいです。ぼくはずっと誰からも理解してもらえない孤独な人生でしたから。

男性運動にも関わったけど、ぼくとは真逆の問題を抱えた人ばかりだったので、決裂してしまい、今となってはトラウマです。男は一種類じゃない。「ガラスの天井」の上にいるのも男ばかりだけれど、「ガラスの地下室」にいるのも男ばかりです。

この頃のぼくは仕事とボクシングとわずかな友情の日々です。今年の夏は夏季講座も担当させてもらえましてし、ボクシング仲間とも楽しく、学生たちとも良好です。

日々の生活の中で、少しでも進歩があれば、俺はまだ生きていてもいいんだなあ、神様は俺にさせたいことがあるんだなあという気持ちになります。まだまだ天国に行くのは遠い先です。笑

男は痛い！ P119～

古川秀明

本当に久しぶりに講演会&ライブを書かせて頂きました。何気ない毎日の風景が変わってしまい、寂しいという思いと、新しいやり方の模索と言う未来展望がないまぜになって、それでも元気に歌える幸せを感じています。人間の目が前に付いているのは、前に進むためだとか。その運命に従い、ますます前進しながら精進します。

講演会&ライブな日々 P138～

西川友理

白鳳短期大学で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

コロナコロナと言いつつも、いろんな方法で工夫を考え出していく私たち。お付き合いさせていただいている社会福祉士の通信課程のスクーリングも、最近2～3年ぶりに対面授業をするようになってきました。

先月実施したスクーリング、2年目最終回のみなさんには、勉強してきたことの総まとめとして「今の社会で問題とを感じる事を挙げる→データを集める→課題は何か話し合う→具体的な策を提案する」を、4時間のグループワークで実施いただいています。「介護分野の人材不足」「保育士の待遇の低さ」「世間一般の社会福祉の

イメージが“楽しくなさそう”すぎる」「介護支援専門員の専門性の格差」…皆さんの仕事で実際になんとかしたいと考えていることが根底にあるから、ワーク時間が進むにつれて、皆さんどんどんヒートアップしていきます。そしてそれらの課題に対する具体的なアイデアも、バラエティに富んでいます。「福祉のお仕事体験施設、フッザニア(フッザニア)、通称“Fuzza”！」「自分に合った福祉施設からの逆スカウトも？！お仕事マッチングアプリ！」などなど、面白いものが沢山！

4 時間終わってみれば、「データって大事やねえ…」「あと実体験ってやっぱ説得力あるよね…」という感想。現場の実践から、新しいアイデアは生まれてくるんだなあと、毎回実感するワークです。

そしてワークの総仕上げ、今日から、今から、自分のつながりのなかで、出来ることを考える。SNS 一つで、社会が動く時代。

おおきな社会運動だって、まずは声を上げる 1 人から始まるのです。

数年ぶりに復活した対面授業で、面白く皆さんと議論をする中で、愉快地、わくわくと、現時点で取り組める方法が見えてきたりします。受講生の次の一步の動きに繋がれ！と願いを込めて、毎回楽しく実施しています。

福祉系対人援助職養成の

現場から

P77~

坂口伊都

連載にも書きましたが、体調を崩してしまいました。クラクラする感じが続き、思うように身体を動かせません。今は、大丈夫になりました。児童養護施設の変則勤務の重労働さが身に染みてわかりました。体が動かないので、残念ですが辞職することにしました。久しぶりの無職です。はあ〜。

私が倒れるのを待っていたかのように息子がトラブルに巻き込まれて、家に戻ってくるようになりました。盆も正月も戻って来なかった息子と働き続けて留守がちな母が、同時に家にいることになり、晩御飯を一緒に食べる日々に。これは珍事です。今は、息子の母をしろということなのだろうなと息子の世話を1か月間しようと決めました。「息子の母をした」と思えば、死ぬ

ときにいい気持ちで逝けるに違いありません。ちなみに息子は、これまでと違う土地の新居に引越しました。親子で新たなステージを迎えています。

家族と家族幻想

P142~

河岸由里子

【メキシコ料理】先日娘たちとメキシコ料理店に行った。メキシコ料理のルーツは約 6000 年前のアステカ族やマヤ族などの古代先住民族の料理を母体として発展し、約 500 年前にスペイン人が、豚肉を持ち込み、スペイン料理の影響を受け、更にアメリカの影響も受けて成立した料理だそう。トウモロコシ、インゲン豆、ひよこ豆などの穀物に多様な唐辛子を使い、辛みのきいた料理である。2010 年にユネスコに登録されている。暑い夏には最適だ。辛めの料理にはやはりアルコールが良く合



う。ビールはコロナ、そしてテキーラのカクテルを次々飲みながら、大量のコブサラダ、トルティーヤ、そして鳥と豚肉のバーベキュー等々。久しぶりに、これでもかというほど食べ、おなかが一杯になった。クミンが使われていると、アラビック料理とも似てくる。これは恐らくスペイン人が入ったときにアラブからもたらされたのではと思う。メキシコ料理は日本人にも合う。辛くするソースは6種類あり、グリーンハバネロ、レッドハバネロはじめ大辛、辛口、中辛などがあったが、使うまでもなく、ハラペーニョの辛さが程よかった。肉のバーベキューではパフォーマンスで、店員さんがテキーラをかけて火をつけてくれるのだが、ちょっと火が強すぎて、店員さんもう少しでやけどするところだった。(笑)

久しぶりの家族の時間であった。おいしかった！！

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐらうむ かかし 主宰

ああ、相談業務

P83~

先人の知恵から

P195~

岡崎正明

この夏のプライベートで心に残っていること。ひとつは家族で行った四国旅行。以前から乗りたかった最新フェリーも、道後温泉も、高知の日曜市も楽しかったが、一番の思い出は高知から松山に帰る道。ナビが恐ろしく狭い国道を案内し、ケータイの電波も1時間くらい入らないウネウネ山道を、冷や汗をかきながら運転した。このままボツンと一軒家にたどり着くのでは？と思うほどのルートで、家族には「ダイジョーブ！」と強気でいたが、内心ドキドキしていた。あのナビの言う事はもう聞かないようにしようと思う。

もうひとつは NHK の「ドキュメント 72 時間」の特番。珍しく夫婦でのんびりそれを観て、なんてことない会話をしたのがなんだか良かった。出てくるいろいろな人の、ちょっとだけ語られるエピソードから見えてくる人生模様。説明できないが、なんだかいいのだ。そんな話に勇気づけられたり、気づきをもらう。どこかでこれと似た感覚を感じたような…と振り返り。ふと、団さんの「木陰の物語」読後感に似てるな一と思った。ちなみに私のベスト1は、大阪西成の 24 時間食堂。

役場の対人援助論

P126~

大谷多加志

たぶん小学生高学年の頃、両親の実家がある鳥取への帰省の際に、少し足を伸ばして大山に向かった。頭上には停止したリフトが見える、冬はゲレンデであろう草の丘をひたすら登っていった記憶が残っています。だからたぶん 30 年ぶりに、息子を連れて大山を訪れてみました。最初に訪れた時とほとんど変わらない風景が懐かしいような、過疎が一層進んでいる鳥取県が危ぶまれるような、なんとも言えない気持ちになりました。

息子は息子で、特に面白がっている風もなかったのですが、夏休みの地理の宿題を済ませるために、何か旅先で立ち寄れる場所はないかと思案していました。何の

思い入れも無い土地なので、ネットで色々検索してもピンと来ない様子でしたが、道中でやたらとみかけた「むきばんだ遺跡」という看板に目を惹かれました。他にあてもないので向かってみたところ、弥生時代の集落の跡が見つかった史跡ということだったので、割と本気で再建した弥生時代の竪穴式住居や高床式倉庫が立ち並ぶ光景は、広大な敷地と他の客がゼロという状況も手伝ってちょっとしたタイムスリップ感がありました。

団遊さんの Note で知った「週末縄文人」の動画で、竪穴式住居を作る労力を目にしていたこともあり、集落の様子が一層壮大に感じられるとともに、弥生時代には伝来していた鉄器は、建築にも絶大な効果を発揮したのだらうなあと思いを巡らせます。



発達検査と対人援助学
P132～

馬渡徳子

8月6日は、高校卒業迄の私にとっては、祖父母と早朝の電車に乗って広島原爆ドームにお祈りに行く日であった。

2014年以降は、山口県の実家が床上浸水に遭った日ともなった。連れ合いがSNSをしているので、毎年その日に被災証明と損害保険申請の為に撮った写真がアップされてくるので、ふりかえっている。

今年のその日の石川県は、前々日の早朝より28年ぶりの大雨で、災害警戒アラームと自治体の災害放送に目が覚めた。町内の防災・消防団員登録をしている連れ合いは、当直明けから何度も28年前に氾濫した川を、仲間と監視・町内を巡視していた。

溝からあふれた雨水で道路は冠水したが、今回は5～10cm程で収まった。この家を建てた時に、九州出身の義父母の意見で「台風に備えて、①周りの家の平均より高くしたこと、②駐車場を道路から斜面

にして、カーポートを大雪にも耐えるしっかりとしたものにした」ことが、今回も奏効した。改めて先人の経験知はすごいと思った。

今回、全国ニュースの通り、小松と白山の山間部地域が大変な被害となった。猛暑とコロナ禍のさなかの復興作業に、心よりお見舞いを申し上げ、今の自分にできることをしたいと思う。

馬渡の眼 P175

団士郎

第50号、継続して13年目、一度も遅延、合併号はない。連載執筆者50人越え、50冊目、以上はマガジンのことだが、それなら編集後記に書く。ここでは、自分がこれを持ってきたことが嬉しい。

大昔、小学校の通知表に、「閃きは良いが根気がない」と書かれたことが強く心に残ってしまった。そんな傾向はあったかもしれないが、顕著にそうだったとは思わない。

ただラベリングは自分の中で簡単には剥がせなかった。ずっと今に至るまで、それは意識にあった。そこに意地を張ったわけではないが、大人になった私は、何事も長続きする男になったと思う。

65年近くも経っているのに、こんなことを書いていることからわかるように、「根気がない」と評されたことを、子どもながらに腹を立てていたのだ。いまだに独り言で、「私は根気のある方だと思うけど…」とつぶやいたりすることがある。

今ではあの一言が、私をなにかにつけて息長い大人にしてくれたと思って感謝している。よく言われるように、ほんの一言が誰かの人生を地獄にも花園にもする。口数の多い私は、誰かの人生に「根気がない！」と同類のことを言ったりしてはいないだろうかと、自身の記憶と裏表で思ったりする。

晩年 D・A・N 通信 P52～

鶴谷 主一

マガジン本文にあるように7月にインドネシア教職員組合のZoom研修会にパネラーとして参加しました。聞いてはいたけど、時間のズレや通信状態の不具合など

さほど気にしない様子で、時間は優に1時間半は延長して終了した。

研修の前には、頭にヴェールを巻いた何十人もの(おそらく選抜)インドネシアの先生方が画面に現れて国歌を合唱し、いろんな儀式がひとしきり行われて、お国柄だなあ、と感心していると、参加人数の数字がみるみる上がって、900・・・1K(1000人以上)と増えていって、こんなのはじめてみた！いろいろと驚きの体験をさせてもらった。

6月には、マレーシア大学の先生が来日した折に弊園によっていただき一日見学していただいた。アジア圏で、日本の小学校教育(科目以外の学級活動やお掃除など生活指導)が注目されており、関心が幼児にも向いてきたのだという。教育改革が進行しているようです。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-ki.jp>

メール office@haramachi-ki.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から P72～

水野スウ

2022年真夏の一夜、「第4回対人援助学マガジン執筆者トークライブ」にお招きいただき、オンラインでお話しさせていただきました。聞き手は、編集長の団さん、編集部と執筆者の方たち、マガジン読者さん、そして私の友人たち(が多かった！)。

トークは、私が団さんとどうやって出会い、なぜマガジンで連載することになったのか、というあたりから。対人援助学会のこともマガジンのこともまったく知らない友人たちに、この夜のトークはそれをはじめで知ってもらい、すごくいいチャンスでした。語りながら私自身のきもちもうれしかった。この企画のおかげで、マガジンが私にとって一体どういう意味を持っているのか、あらためて見つめなおし、考えることができたからです。編集部のみなさま、この度の貴重な機会、本当にありがとうございました。今号は、その夜話したことを中心に、新しく発見できたことも書き足してのトークライブ誌上りレポートです。

*

この秋は、憲法お話の出前ご注文が去年よりずっと多くなりました。ウクライナの

戦争は一向に終わる兆しが見えない。安倍元首相の銃撃事件のあと、これまで表に見えていなかったことが次から次へ、あふれだす情報は洪水のよう。その大波に流され呑み込まれぬよう、溺れぬよう、うんと心して、平和と憲法語りの秋の出前に向かいます。平らに話す平話と対話と平和が、ひとつながりであることを信じながら。

きもちは言葉をさがしている
P110～

脇野 千恵

今年の夏も広島へ出かけた。亡父親の郷里でもある。まず向かうのが、世界遺産の原爆ドーム。そして、資料館へ。猛暑だったが、若い人たちが家族連れが多かった。この資料館は、昔に比べると随分と様変わりしてしまった。良いか悪いかは別に、被爆の様子がわかるリアルな物がそのまま展示されていたが、いつからかテーマに沿った展示となり、整然と演出された感がある。今年は、学徒動員で広島市内に集められていた児童生徒の被爆の記録だった。父親は原爆投下の当時招集されていて、九州の果てにいたそう。あと数日戦争が続いていたら、捨て石のように南方に送られていたと言っていた。軍隊の解散となり、郷里に立ち寄ろうとしたら、新型爆弾だからと降りることを許されなかったとか。仕方なく家族が待つ京都に戻ったそう。ここに来ると、父親がそんなことを言っていたなと思出す。その当時も今日のように澄みわたっていただろう青い空。猛暑の中、橋を渡り、川を眺める。今年も広島に来られてよかった。

こころ日記「ぼちぼち」part II
P250～

中村正

『どうして男はそうなんだろうか会議』（筑摩書房）が出版された。澁谷知美さんと清田隆之さんが5人の男性性ジェンダー研究者と対話して編集したもの。私は「男性性と暴力コミュニケーションに潜む被害と被害の両面から考える」というテーマで対話した。ひとりあたり40頁近いので結構なボリュームである。さらに、『現代思想』7月号（青土社）は「加害を考えるー臨床・司法・倫理」という特集で「加害行為研

究の視界ー加害性・暴力性・暴力の文化・マイクロアグレッションー」を寄稿した。この夏に刊行された直近のものなので宣伝。また、大学の演習が取材され、ゼミの学生たちが楽しそうにインタビューを受けた。「マッチョも学ぶ男性視点のジェンダーー立命館大学中村正ゼミ」というもの。

『朝日新聞』EduA版
(<https://www.asahi.com/edu/article/14688276>)。

これはフリーだ。ご笑覧を。男性と男性性研究はますます広がりを見せている。

臨床社会学の方法
P21～

千葉晃央

合間を縫って、秋田の竿燈（かんとう）祭りを観ました。小学生以来40年ぶりです。実家の町内「保戸野鉄砲町」からも竿燈が祭りに出ます。「福」があるようにの「おたふく」の意匠。



私が小さい頃は、バブリーな時代で、太鼓と囃子を載せる楽器隊？のトラックはもっと大きく、ド派手なイルミネーションの印象がありましたが、現在は軽トラがほとんど。そして、市内の各町単位でのエントリー。加えて、県庁、市役所の行政も、さらに企業も、大学も竿燈チームで参加という地域全体の大イベント。屋間は竿燈の技を競い合う競技会、頭で支えたり、腰で支えたり、肩で支えたり、の妙技。夜は本番。終わってからは各ホームに戻って迎え竿燈。夜の10時ごろまで続く。これが数日間。

京都でもお神輿を担いだことがある。こうした伝統をベースにした地域のつながりについて、様々思うことがあった。NHKの「よみがえる新日本紀行」をよく見る。番組の内容は、当時、昭和の日本各地の風土や人々の営みを描いた「新日本紀行」の映像リマスターをして、その番組の舞台を現在再び訪ねた内容も合わせて放送して

いる。ある回では、1970年代、地域の祭りなどを行う青年団のような組織の特集。それと同時に地元に住んでも、地元に戻っても、そこには一切かわらない若者たちがいて、そこはそこでフォークソングの集いで盛り上がるという様子が取り合上げていた。祭りという文化が持つ、価値観やつながり方、関係性については、「凝集性」もあるがその逆の働きがあることも考えざるを得ない。祭りは文化でもある。今回、そういった文化がその地域に与える影響はよくみえるなあと感じられた。父母は東京、大阪にも住み、秋田にも住んだ。それぞれを知った上で、町内から竿燈は出るが賛助しているだけというスタンス。地域の歴史の色々なこと、そして現在の地域の置かれている状況が様々つながる経験となった40年ぶりの竿燈祭りの経験でした。一番好きなお祭りであることは揺るがないかな。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17～

篠原ユキオ

サンペさん追悼

ジャン・ジャック・サンペはフランスの漫画家である。僕が20代の頃から多大な影響を受けた憧れの人だ。

そのサンペ氏が8月11日に亡くなった。89歳だった。

彼の作品集は今も仕事場のすぐに手の届くところに何冊も並んでいる。Amazonの無かった当時は、なかなか手に入れるのは難しく、大阪駅前にあった旭屋書店でも小さなサイズのをやっと見つける事ができる程度だった。

だから展覧会などで上京した時は必ず銀座4丁目にあったイエナという洋書店に行き、彼の本を探した。ハードカバーの豪華本はそれなりの値段がしたので帰りの財布には新幹線代しか残っていない事も多かったものだ。

日本のヒトコマ漫画家には無いお洒落な描線とユーモアセンスに魅了されてきた。彼が雑誌『ニューヨーカー』に依頼されて描いた表紙絵の数々はニューヨークへの

憧れも呼び起こした。

その夜は世界中の漫画家たちの Facebook にはサンペ氏へのメッセージが次々とアップされていて世界中の漫画家に影響を与えた人であったことをあらためて感じたものだった。jyosi 忘れられない日となった。(合掌)



HITOKOMART
P266～

鵜野祐介

コロナワクチンの4回目接種を8月上旬に受けて以来ずっと副反応を患っています。微熱と倦怠感と食欲不振・・・、サザンの「夏をあきらめて」を思い浮かべていました。3日ほど前から少し良くなってきたと感じていますが、早く「美味しい酒が呑みたい！」と思えるようになりたいものです。皆様もどうぞご自愛ください。

うたとかたりの対人援助学
P202～

山下桂永子

6月末に2年半ぶりに旅に出ました。沖縄に2泊3日。いつもならレンタカーで移動するのですが、今回はモノレールとバスの旅でした。一日20キロ歩いて(方向音痴なのでそのうち5キロぐらいは道に迷っていました)見たいものを見て、食べたいものを食べて、両手いっぱいのお土産を買って帰ってきました。映画にも音楽にも疎くて、読書もこれといってたくさんは読まなくて、これまであまり自分には趣味がないように思っていたのですが、「あ、趣味旅行だった」と思い至りました。そして明日からまた少し旅に出ます。趣味のためなら頑張れるとよく言いますが、対人援助マガジンの原稿も旅のためなら締め切りの少し前に出せそうです。めったにないことです。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために

P184～

小林 茂

マガジンの投稿再開します！

勤務先の大学のキャンパス引越いや、幼稚園の建て替えの案件などがあり、連載をしばらくお休みさせていただきました。しかし、幼稚園の建て替えの案件は、えりも町の急激な少子化、新型コロナやロシア＝ウクライナの戦争などの影響もあり建築資材が高騰したこと、認定こども園移行するにも新築に見合う補助金の助成も見込めないこともあり断念することになりました。

けれども、このまいつまでも連載のお休みを続けるわけにもいきません。連載、再開です。よろしく願いいたします。

対人支援点描
P136～

中島弘美

対人援助学マガジンは第50号となった。ということは約13年執筆していることになる。毎回、締め切り日を守れるかなと思いつつも、なんとか途切れずに仕上げられた。次は100号を目指して、と言われると、そんな先まで書き続けられるかな？と思いつつ、もしも、このあと12年、合計25年続くのなら、素晴らしいことじゃないか～と思う。

この文章を書いているいまも、コロナ感染の影響がある。相談に来られるクライアントさんや周りにいる人が次々に陽性や濃厚接触者になり、対面面接の予約変更の連絡が入る。また、学生さんたちの陽性で、対面授業も休講になった。第七波はこれまでで最も感染者が多く、その影響を実感している。このコロナ感染も100号を執筆しているころには、過去の話になっているのだろう。

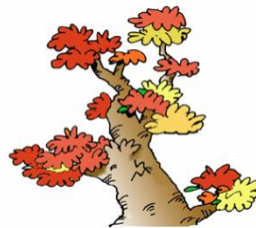
カウンセリングのお作法
P39～

藤 信子

今年は、6月から7月にかけて、蜩がよく鳴いていた。ちょっと早いんじゃないかと思うのは、私の経験では、蜩は夏休みの終盤、秋が近づいてきたときに鳴いていたような感じなのだ。夜明けや日暮れに、あの鳴き声を聞くと、夏が終わるという感じ

で、なんとなく身構える感じ。赤とんぼをみて、そうかと日々が過ぎていくのを感じたのも夏の終わり。しかし今年の夏は暑すぎる、早く秋になって欲しい。

コミュニティの中で
P



竹中 尚文

七月と八月は忙しかった。ご想像通り八月はお盆参りがあるから忙しい。私は全部の門徒さん(檀家といわず門徒という)にお参りするのではなく、希望のあるお宅だけにお参りをする。それでも全門徒さんの四分の一ほどの軒数である。他の多くは浄土真宗独特の行事である「報恩講」をお勤めする。私は祥月命日や法事以外で、少なくとも一年に一回は全門徒さんのお宅にお参りをしたいと思っている。そんなわけで、八月に入ると忙しくなる。忙しいが、それぞれのお宅でのんびりと話をして帰りたいと思っている。◆お盆参りで忙しいのは毎年のことだ。今年から、コンビニ収納というシステムを採用することにした。収納というのは「門徒会費」のことである。お寺を維持運営していくために会費を門徒さんたちに支払ってもらうのである。その意味で「護持費」と呼んでいるところもある。こうしてお寺が存続しているので浄土真宗では「住職のお寺ではない」という声も聞く。ウチのお寺は昨年度までゆうちょ銀行で会費を振り込んでもらっていた。ところが、今年一月から振込用紙と現金を持って行くと、手数料がかかるようになった。そんな事情で、コンビニで支払ってもらえるようにした。「した」といったが、七月から動き始めて、代行業者と契約を済ませて振込票を印刷発行するのに今も四苦八苦している。◆コンビニで何かの料金を支払うのは日常のことだ。先日アメリカの通販業者で買い物したら、日本のコンビニエンスストアでの支払選択肢があった。近所のコンビニで現金支払いをすると、直ぐにアメリカから支払い確認済みのメール

が届いた。ほどなく商品が届いた。「便利になったなあ」と思いながら、ずっと受け手の立場だった。それが振込票を発行する側に回るとは思いもしなかった。考えてみると、この一、二年で法事の状態も変わった。コロナ禍の状況で移動が困難な親戚の方にオンラインで繋いで法事を中継するという状況に何度か出くわした。このところ、テレビ画面で YouTube の番組を見ることが多くなった。既存のテレビ局の番組を見るより面白いと感じる番組も多い。近所のお兄ちゃんが面白い番組を作るものだと感心すること多い。一方でテレビ局の作る番組には膨大な時間とエネルギーをかけて作る番組もある。この状況は何十年も前から飲食店では通常のことだった。何十年も修行を重ねた調理人が作る料理も、数時間の研修を受けたアルバイト調理人の作る料理も同じように食べてきた。こんなことを半世紀も前に小田実氏が書いていたように記憶している。◆こんな時代の中で、私はそれぞれのお宅でのんびりと話して帰る坊さんでいたい。

宗教と人間 P116～

寺田 弘志

前号からゴルフの話が続きます。

渋野日向子選手がまた、ドキドキ・ハラハラさせてくれました。3年前、全英女子オープンで優勝した渋野選手。ここのところ予選落ちが続いて、渋野選手の善戦を予想する人は少なかったと思います。期待されすぎないのが良かったのか、全英オープンとの相性が良かったのか、初日単独首位、その後、順位を下げるも、最終ホールまで「もしや、もしや」と思わせる活躍でした。

日本人として初の2度目のメジャー制覇かと、ワクワクしながら深夜に応援していたのですが、惜しくも一打差でプレーオフを逃しました。

スポーツで勝ち続けるということは、とても難しいことです。周囲やマスコミからも期待されるし、取材や試合以外の仕事が増えて、練習時間も削られます。

私なんて、人に見られるだけでスイングが乱れるのに、たくさん注目が集まるので、心が落ち着かなくなります。コースや天候も変化するので、プレイを修正しない

といけません、うまく修正できるとは限りません。ですから、連勝ということはめったにできません。

ところが、連勝は難しいものだ思っていたところへ、ルーキーの岩井千怜選手が国内大会で2週連続勝利を収めました。初優勝して、次も優勝できた女子プロゴルファーは、過去にたった二人しかいないそうです。

17歳のJK馬場咲希選手が全米女子アマで、日本人として37年ぶりに優勝したというビッグニュースと、岩井選手の初優勝がたまたま重なりました。岩井選手に注目が集まらなかったということが幸いし、連勝できたということもあるかもしれません。

施術も似ています。一度施術がうまくいくと、別の人にも同じことを試そうとしてしまします。たまたま原因や症状が似ているとうまくいくこともあります、原因や症状は患者さんごとに違うので、同じ手はめったに通用しません。紹介で来られた新規の患者さんが、大幅な改善を期待して来院されることもあります、期待されすぎると、施術がしづくなります。

大きな期待をされている患者さんが来られたときは、「すぐには効果が現れないかもしれません」とか、「長くかかるかもしれません」とかお伝えして、ハードル(期待)を下げさせていただきます。できるだけ早く治っていただけるように最善は尽くしますが、期待に応えようとしすぎると、がんばりすぎてしまったり、解決の糸口を見つけれなくなったりします。

ゴルフで「ラインが見える」ということが言われます。ボールを入れるカップ(穴)の周りの、芝が短く刈り込まれたところをグリーンといいます。グリーンには、傾斜や凸凹があるので、ボールはまっすぐには転がりません。右や左に曲がったり、減速したり、加速したりします。グリーンの上で、カップに向かってボールの転がる道筋を「ライン」と呼びます。正確なラインがイメージできていれば、そのラインに向かってボールを打てば、きれいにカップインするわけです。ゴルフ初心者の私がグリーンの上に立っても、まったくラインが見えません。

しかし、施術がうまくいっているときの私には、問題が生じている筋肉や筋膜のラ

インがくっきりと見えています。

ゴルフも施術も、あまり期待されていなくて、ラインがよく見えるときに、うまくいくように感じます。

接骨院に心理学を入れてみた

P215～

山口洋典

「お盆にお父さん、帰ってきた？」先日、お盆明けに帰省した折、単刀直入に母から尋ねられました。母曰く、「丁寧な準備をして迎えたのだから、夢に出てきてくれてもいいのに」という前提での問いかけでした。「あまり夢は見ない方だし、そもそも供養の上での物語だから」と返したところ、「後ろ姿が似た人が夢に出てきた」と、長年連れ添った夫との突然の別れから癒されるには、まだまだ時間を必要とするのだ、ということ改めて実感する返答に触れました。

8月の3日から10日には、岩手県大船渡市を訪れ、「盛町灯ろう七夕まつり」の運営をお手伝いさせていただきました。七夕飾りと言えば仙台七夕まつりが有名ですが、この地域でも先祖の慰霊の行事として約400年の歴史があり、110年以上前からは絵灯籠による山車の運行による現在の形態になったと言われています。東日本大震災で大きな被害がもたらされた2011年にも「鎮魂と復興」を願って開催されたものの、新型コロナウイルス感染症の対策のため、3年ぶりの実施となりました。現在をどう生きるか、ということについて、改めて不在のご先祖の存在も含め、丁寧に向き合っていきたい、と数々の場面で深く考える機会を得た2022年の夏となりました。

PBLの風と土 P209～



見野 大介

引っ越しも無事終わり、遅れを取り戻すために必死に仕事をこなす日々。前号の原稿を作成していた頃の力オスぶり、今思い出だけでもゾツとする。新築することの大変さ、住居と工房を同時に引っ越すことの大変さ、ほんま色んな意味で勉強になりました。

ハチドリの器
P4

荒木晃子

今年の夏は暑かった。脱水症を伴う熱中症の診断を受け、7月第2週、第4週の2度ダウン。8月のお盆前まで点滴通院が続き、体調不良の日常を送っていた。お盆明けに何とか回復すると、今度は大切な友人たちがコロナに感染したとの連絡が入り、いざ、私の出番と気合が入る。どうやら大切な仲間を援助する余力は残っていたらしい。というか、誰かのために何かをしたいという思いが、私を励まし強めくれたように思う。

この春、3年間、研究プログラムで活動した他大学の研究者から受けた、通常では考えられない私への個人的な報復は、私の体に相当なダメージを与えたらしかった。彼女にとっては成功なのだろう。だが、私は彼女の研究者生命を案じ口を閉ざし、生きのびて、大切な友人を支援し、対人援助者としての日常を取り戻した。



お盆には、私に起きた出来事を、今は亡き父と母の仏前で語り、両親の娘であることを誇りに、今しばらく頑張ることができることを確信した。関係したくない人・こと・ものは、必要な距離を置く手法も体得済みだ。これからは、もう少し「選ぶ人生」を送ろうと決めた夏となった。

生殖医療と家族援助
P88～

工藤 芳幸

とうとう家族にコロナ陽性(軽症)が出て、私も濃厚接触者に。大阪在住で第7波に至るまで家族の誰も感染しなかったということの方が奇跡的かも知れません。たまたま夏休み中だったので、仕事などへの影響は最小限で済みましたが、きっと自分も発症するだろうと思って5日間を過ごしました(私は発症せずに済みました)。この制約も第1波の時だったらもっと強いものだったと思います。あの時は自宅勤務でかなり辛かったなあ・・・と思い出しました。ラジオをかけてる1日部屋でPCに向かっている毎日。1日中PCに向かっているのはいつものことなのですが、同じことでも文脈や状況が違くと心身への負荷も変わるようです。この夏の自宅隔離期間はPCには触らず、ただただひたすら食事の用意をして過ごしました。

みちくさ言語療法
P255～

浦田雅夫

京都女子大学に異動し、研究室の窓からは京セラが。8月末、稲盛和夫さんに訃報。人は必ず死ぬのだとあらためて実感。「君の思いは必ず実現する」という稲盛さんの子ども若者へ向けた著書を思い出す。強い思いは人を動かし、社会を動かす。あらためて強い思いを持って、自分のミッションである若者支援を行いたい。

社会的養護の新展開
P70～

小池英梨子

保護猫を飼っていると、なかなか人馴れしなかった子が急に雪解けのように触らせてくれるようになる日が来る。そして、その時の表情がとても良い。嬉しい。



そうだ、猫に聞いてみよう
P187～

サトウタツヤ

思うところあって、50号を区切りに『対人援助学マガジン』を卒業します。年4回設定された4切のおかげで、その時どきに思うことやイベントの記録など、様々なことを書かせてもらえました。また、私の関連する院生や関係者たちにも本誌の魅力を伝え、何人かの方が執筆陣に加わってくれたこともありがたいことでした。

「思うところあって」というもったいぶった言い方をしましたが、還暦を迎えアタマが働くうちはエッセイではなく学術論文をギリギリ書くというところに力を注ぎたいということです。もちろん、私のことですから、またいつかふらっと戻って来るかもしれません。皆さん、ご愛読、ありがとうございました。お元気で！

対人援助学&心理学の縦横無尽
P327～

祝「卒業」(編集長より)